

2025年12月8日

学修行動・成果アンケートについて

学長室
教務委員会

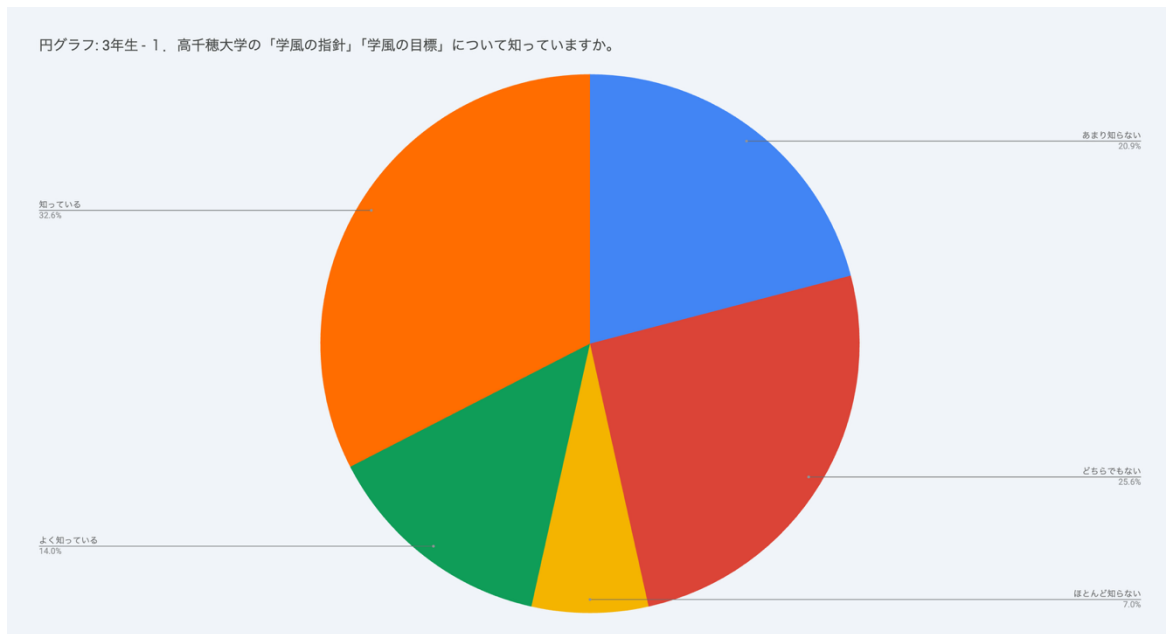
高千穂大学では、学長室・教務委員会の共同事業として3・4年生を対象とした学修行動・学修成果に関するアンケート調査を実施しております。2022年度から始まった調査で継続的に実施されることで、高千穂大学での学びの状況についてアンケート調査を用いて、全学的な状況を明らかにするものとなっています。

2025年度は11月1日～21日にかけて実施いたしました。Googleフォームを用いたオンラインで調査を行い、3年生43名、4年生20名からの回答を得ました。本アンケートは大学の学風の指針、目標についての理解、学修行動（出席状況、取り組み）、教養・専門知識、スタディスキル、社会人基礎力について問うております。

【3年生】

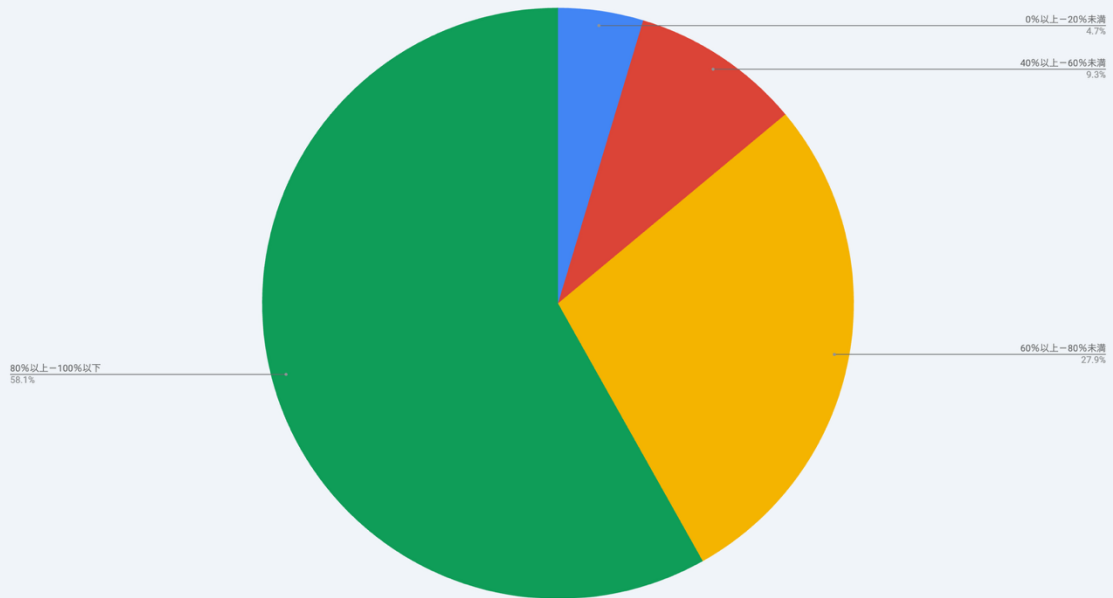
3年生については、授業への取り組みと専門知識の習得に高い意欲と一定の自信を持っている一方で、一部の応用的な技能や社会人基礎力について、まだ成長の余地を感じている傾向が見られます。

1. 授業への参加意識と大学への認識

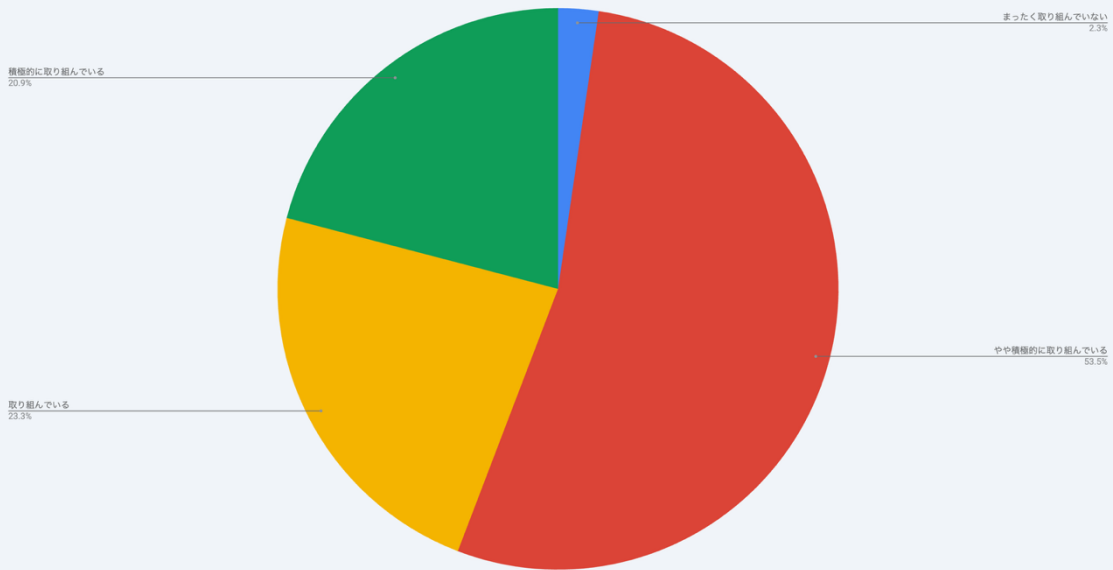


学風の認識: 大学の「学風の指針・目標」については「知っている」が最多ですが、「どちらでもない」や「あまり知らない」といった回答も一定数見られ、全員に浸透しているわけではないことが分かります。

円グラフ:3年生-2. 授業に出席している割合はどのくらいですか。

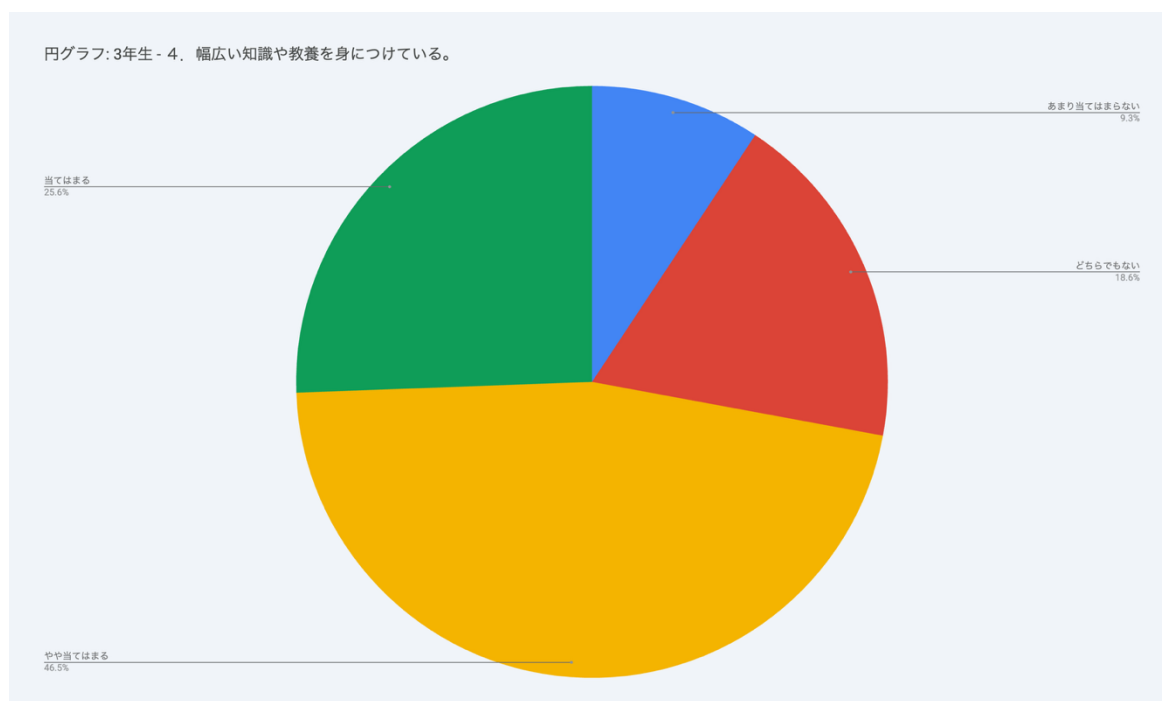


円グラフ:3年生-3. 授業に対して積極的に取り組んでいますか。

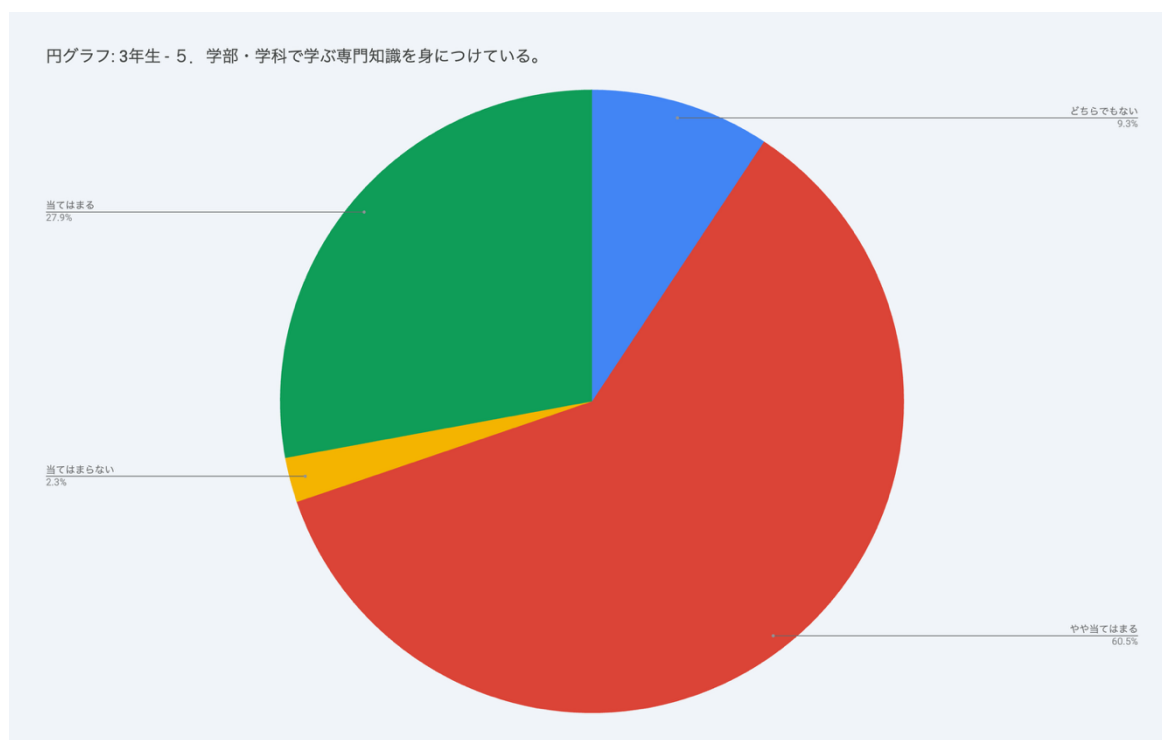


高い参加意欲: 授業への出席割合は「80%以上-100%以下」が最多であり、授業への取り組みについても「やや積極的に取り組んでいる」が半数以上を占めています。学習活動に対する前向きな姿勢が強く示されています。

2. 知識・専門性の習得

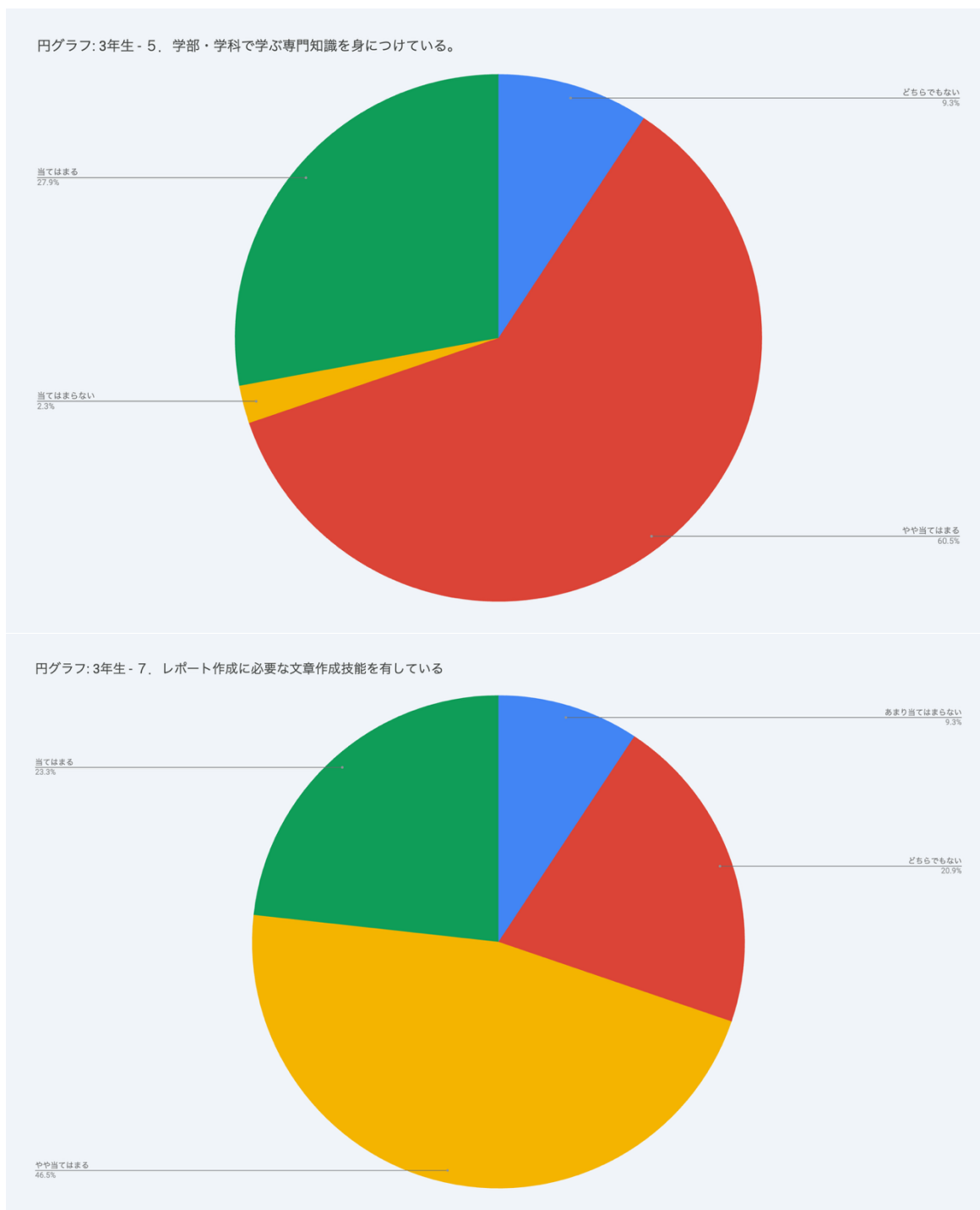


幅広い知識: 「幅広い知識や教養を身につけている」についても「やや当てはまる」が最多であり、専門外の教養についても一定の自信を持っていることが分かります。



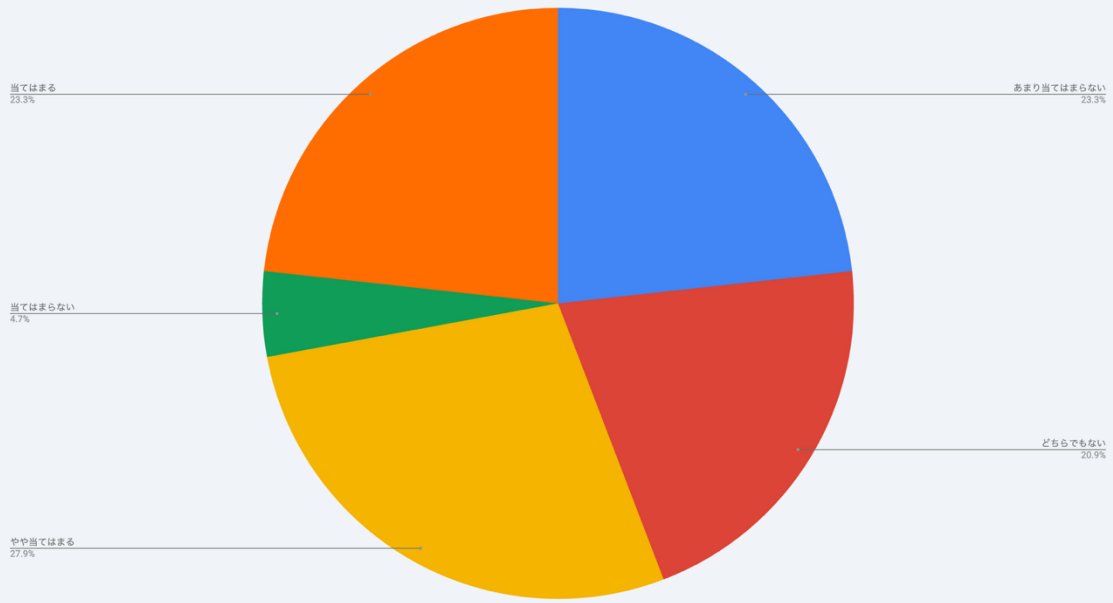
専門知識に高い自信: 「学部・学科で学ぶ専門知識を身につけている」に対して「やや当てはまる」が6割を超えて最多となっており、専門分野の学習成果に対して高い自己評価を持っています。

3. 技能（レポート・プレゼンテーション）



レポート作成に必要な技能は定着：レポートの作成に必要な「情報収集技能」と「文章作成技能」のどちらも「やや当てはまる」が最多であり、これまでの学習を通じて基礎的な技能は身につけていると評価しています。

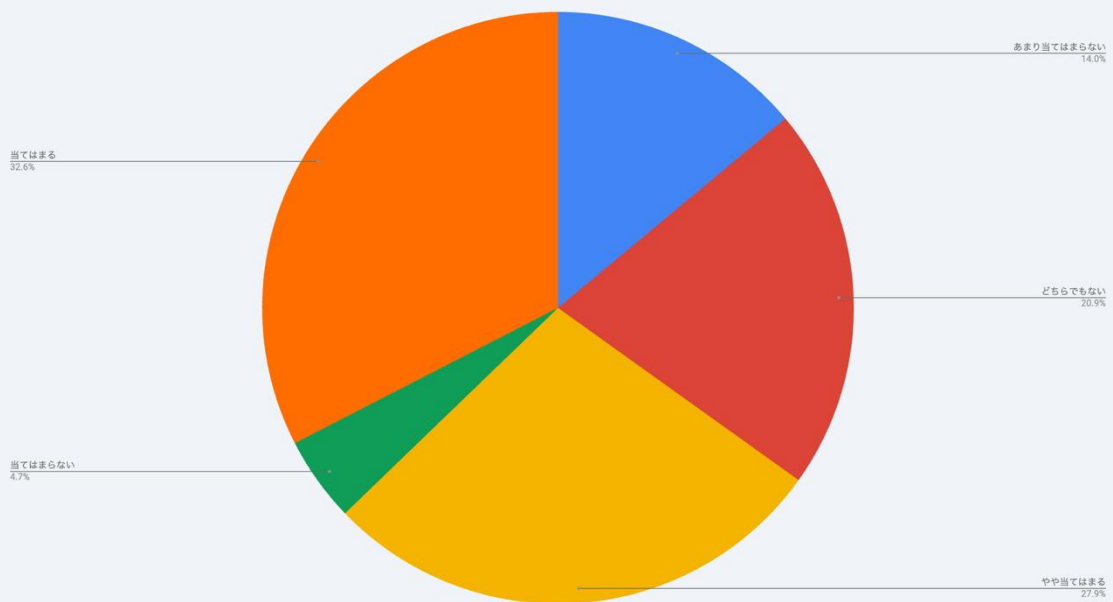
円グラフ: 3年生 - 8. プレゼンテーション能力を有している



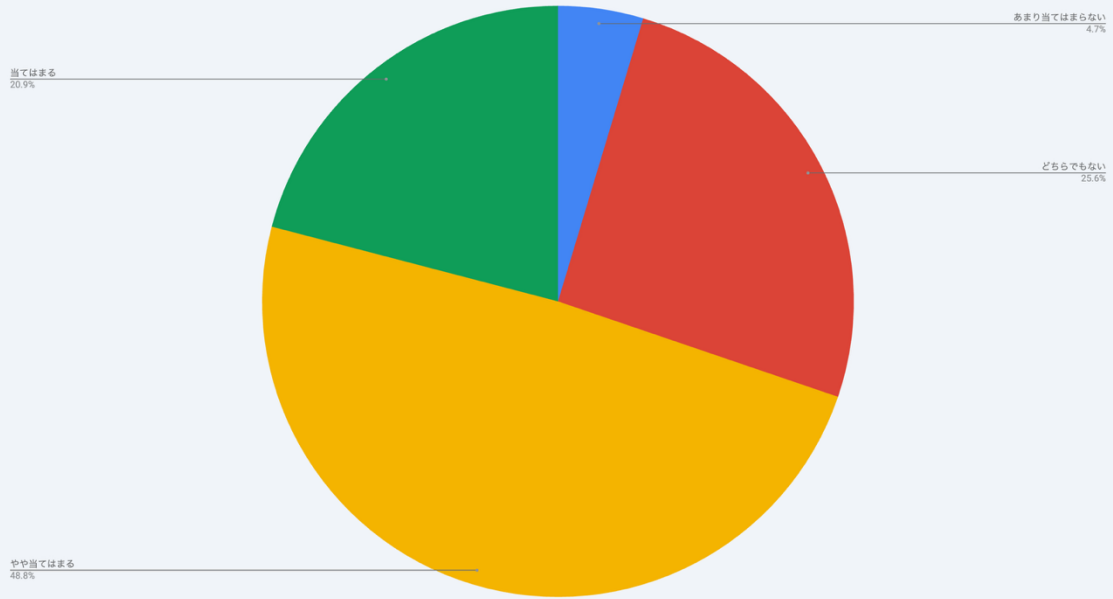
プレゼン能力は二極化の兆し: 「プレゼンテーション能力」については、最多回答は「やや当てはまる」ですが、他の技能と比較してその割合は低く (27.9%)、回答が分散していることから、プレゼンに自信のある学生とそうでない学生で差が出ています。

4. 社会人基礎力 (主体性・思考力・チームワーク)

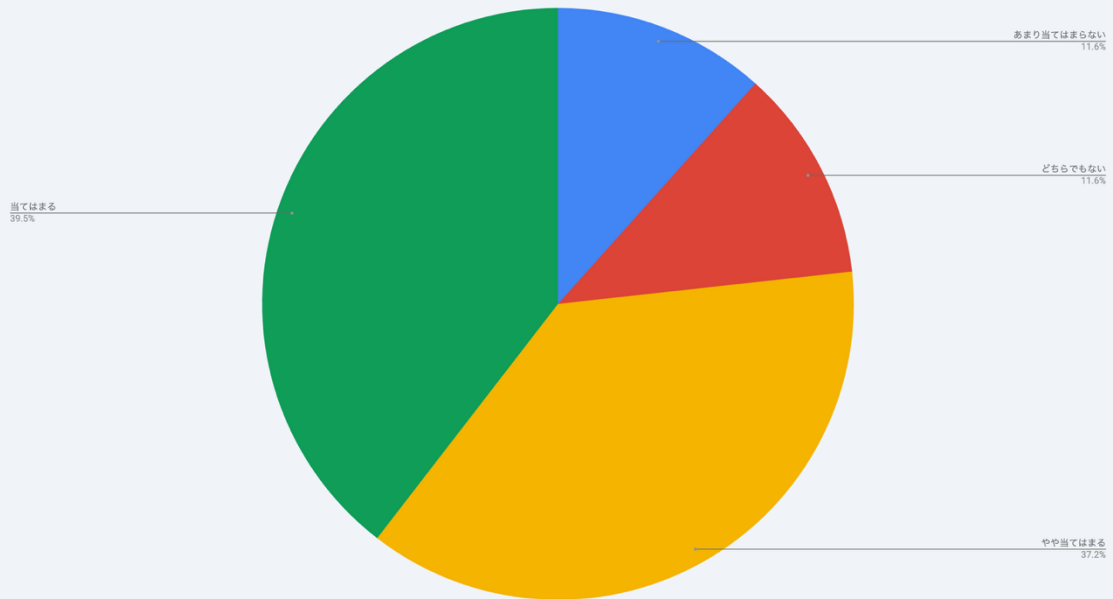
円グラフ: 3年生 - 9. 前に踏み出す力が身についている



円グラフ:3年生 - 10. 考え抜く力が身に付いている



円グラフ:3年生 - 11. チームで働く力が身につけている



行動力と協調性に自信: 「前に踏み出す力」と「チームで働く力」は、最もポジティブな回答である「当てはまる」が最多となっています。これは、積極的に授業に取り組み、グループワークなどの経験を積んでいることと関連していると考えられます。

思考力は「やや」肯定的: 「考え抜く力」は「やや当てはまる」が最多で、強い自信を持つ「当てはまる」の層より僅かに多くなっています。この力については、まだ発展途上であると感じている学生が多い可能性があります。

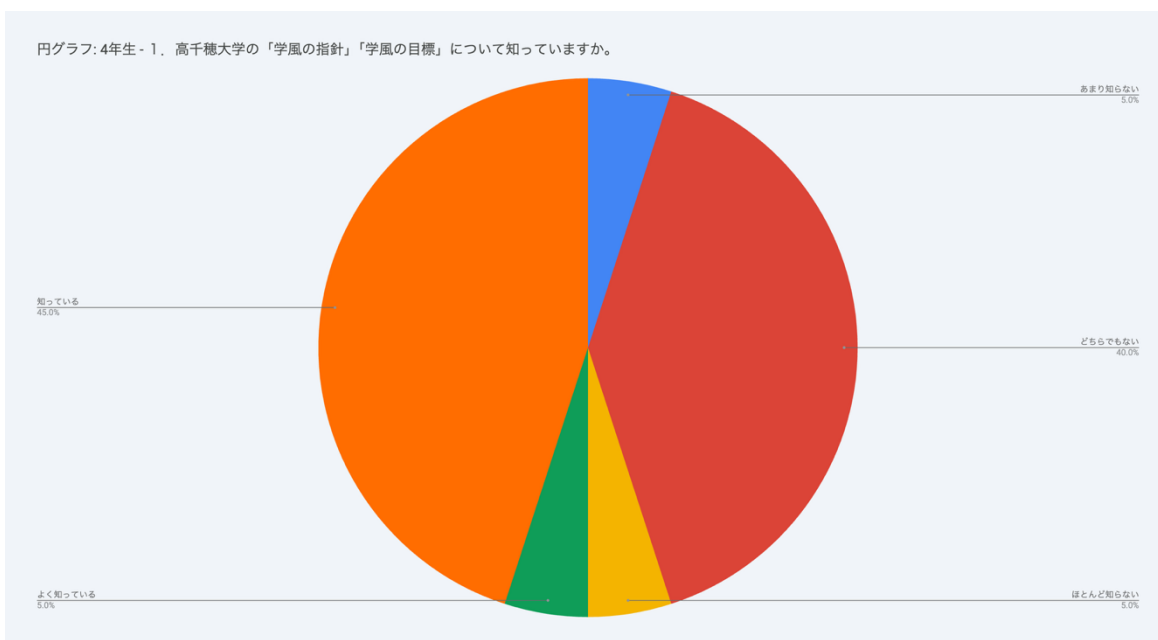
全体的なまとめとして、3年生は学習意欲が高く、専門知識や基本的な技能の習得には自信を持っていますが、応用的なプレゼンテーション能力や、社会で求められる「考え抜く力」

といった項目について、さらにより高いレベルでの習熟を求めているといえます。

【4年生】

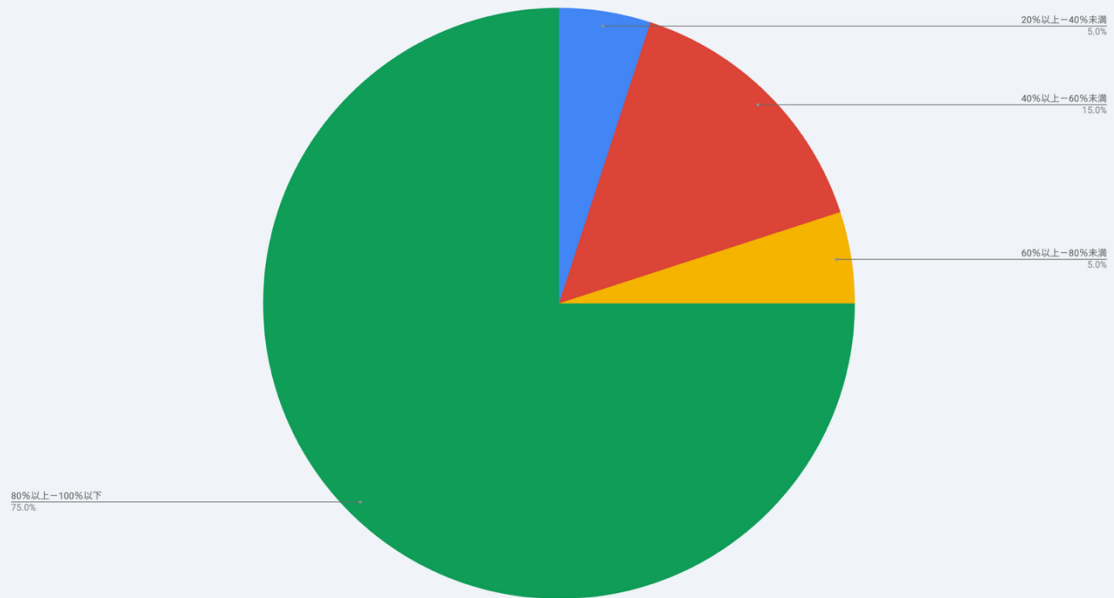
4年生の学生は、授業への取り組みや大学の指針の認識において非常に高い意欲と成果を示している一方で、社会人基礎力の一部やプレゼンテーション能力といった応用スキルに関して、控えめな自己評価をする傾向が見られます。これは、卒業後の社会を目前にして、より厳格な基準で自身の能力を評価していると考えられることもできます。

1. 授業への参加意識と大学への認識

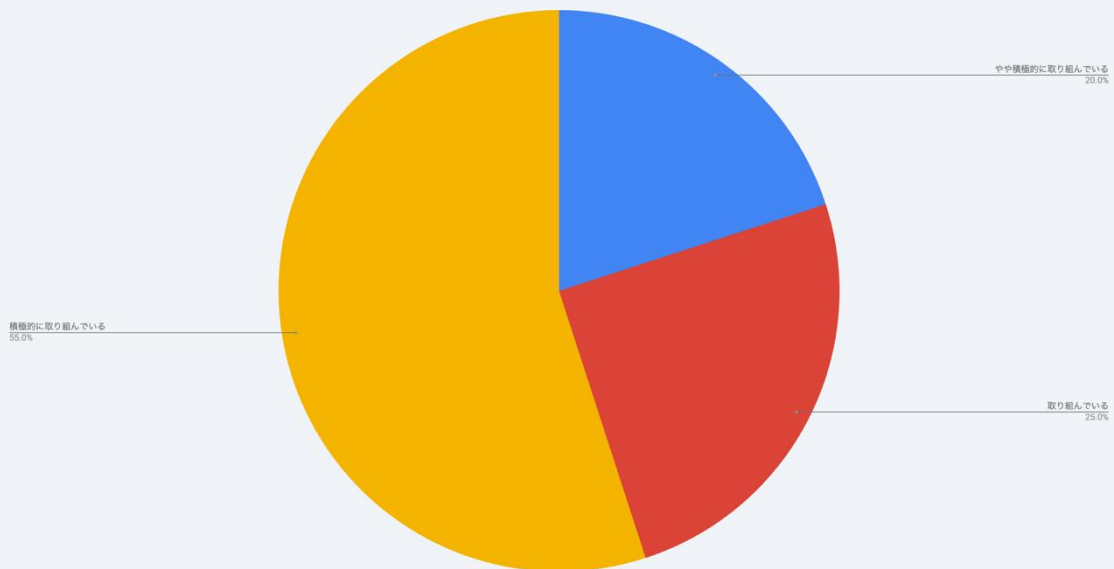


大学への理解度が高い：大学の「学風の指針・目標」について「知っている」が最多（45.0%）であり、3年生と比較して認識度が高い傾向にあります。

円グラフ: 4年生 - 2. 授業に出席している割合はどのくらいですか。

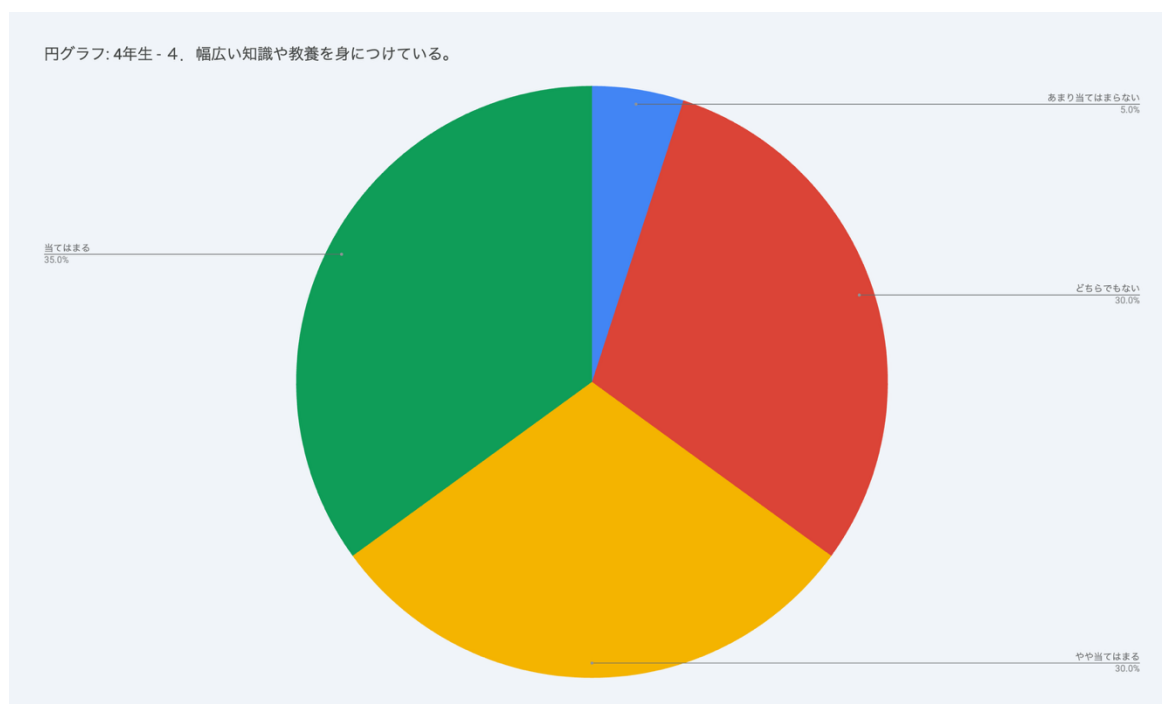


円グラフ: 4年生 - 3. 授業に対して積極的に取り組んでいますか。

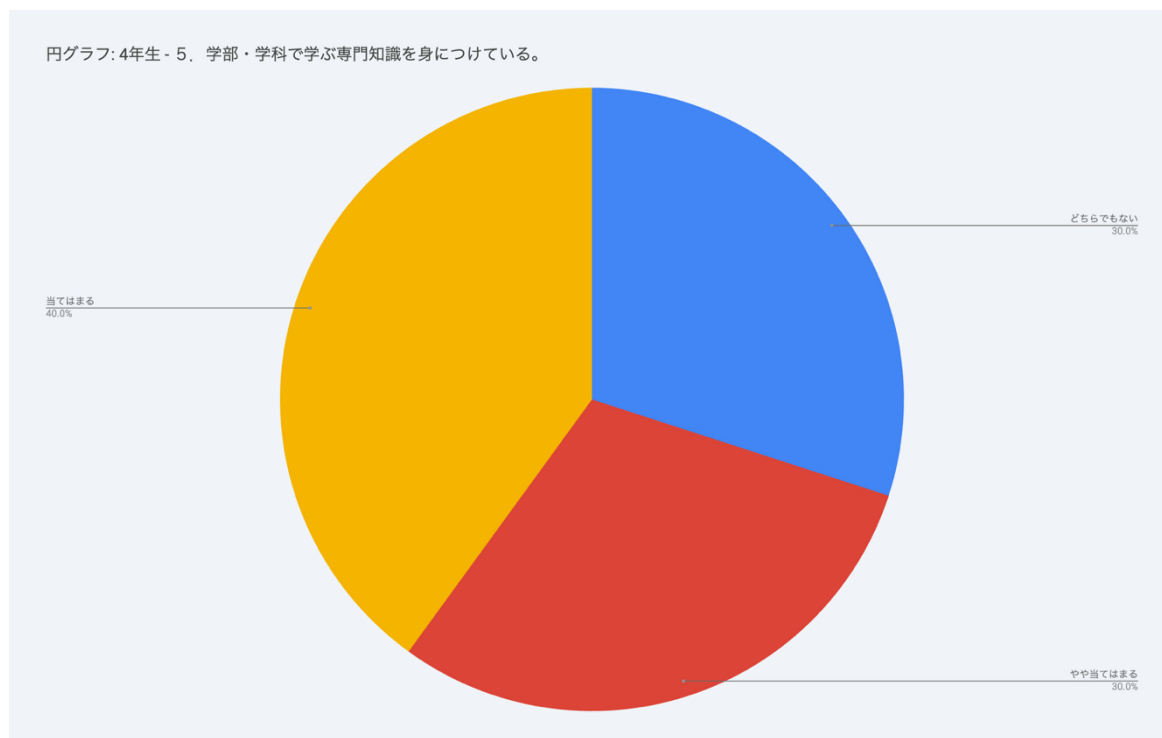


学習への高いコミットメント：授業への出席割合は「80%以上-100%以下」が4分の3を占め、授業への取り組みも「積極的に取り組んでいる」が最多となっており、高い学習意欲が明確に表れています。（3年生の最多回答「やや積極的に取り組んでいる」と比較して、より強い積極性を示しています。）

2. 知識・専門性の習得

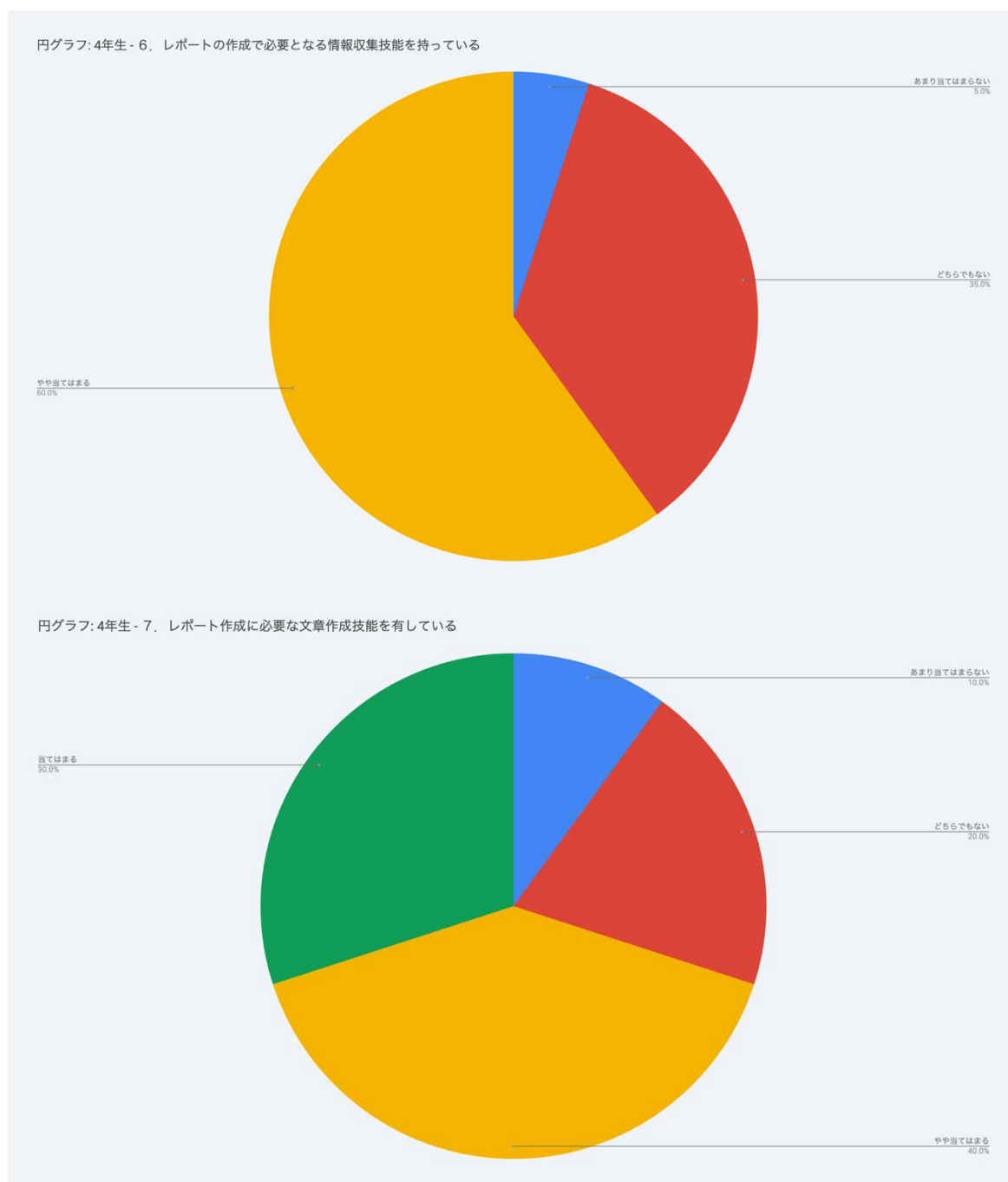


幅広い知識: 「幅広い知識や教養」についても「当てはまる」が最多であり、上位学年として知識の習得が進んでいることが伺えます。

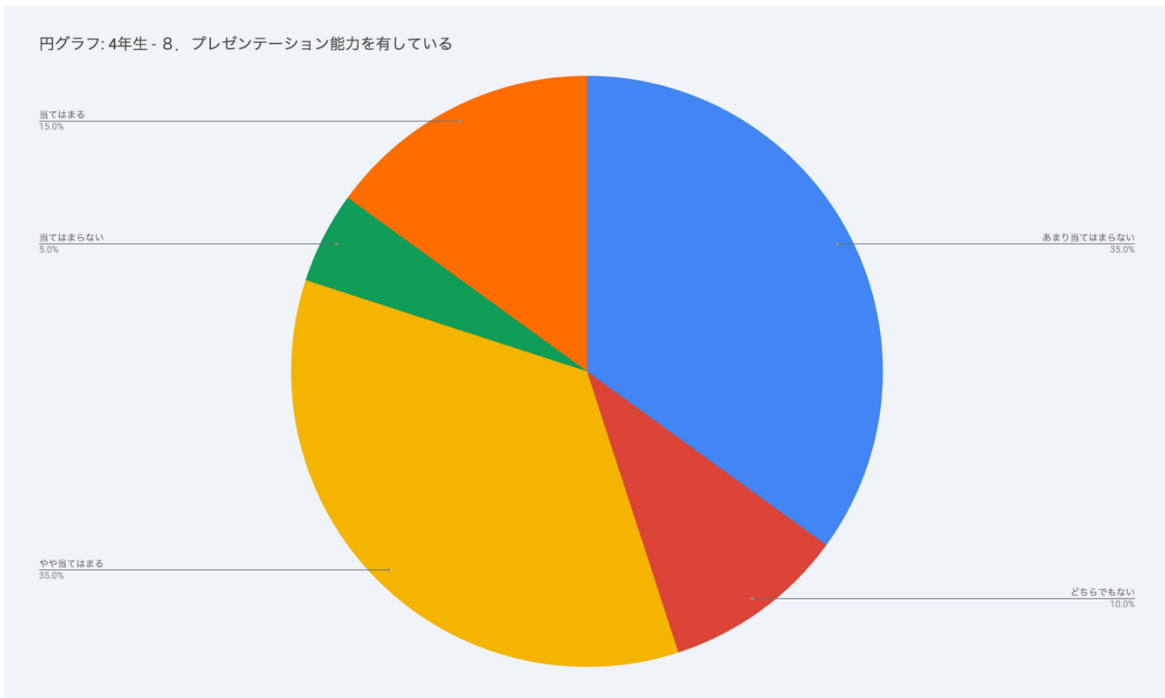


専門知識の習得に自信: 「学部・学科で学ぶ専門知識」については、「当てはまる」(40.0%)と「やや当てはまる」(40.0%)が同率で最多となっており、回答者の8割が専門性の習得に強い自信を持っています。

3. 技能（レポート・プレゼンテーション）

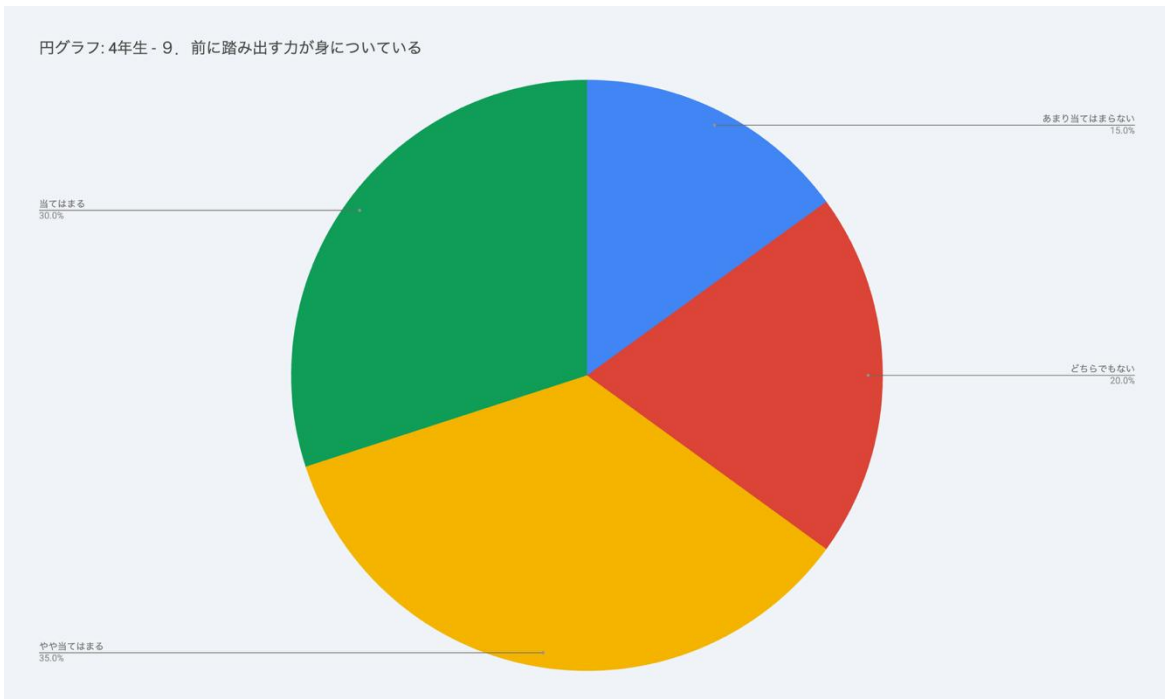


情報収集技能は高い：レポート作成に必要な「情報収集技能」は「やや当てはまる」が6割を占め、卒業論文やゼミでの研究活動を通じて高いレベルで定着していると自己評価しています。

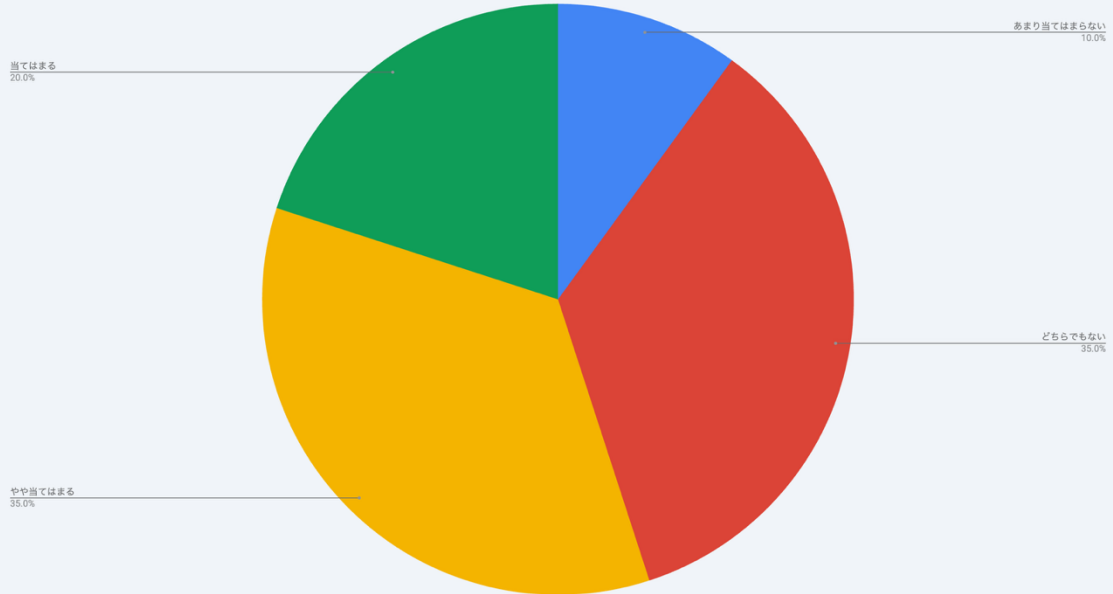


プレゼン能力の自己評価が低い: 「プレゼンテーション能力」は、「あまり当てはまらない」が最多 (35.0%) という結果で、3年生の結果と比較しても最もネガティブな傾向が見られました。これは、授業外の活動や就職活動等を通じて、自身のプレゼン能力に課題を感じている学生が多いことを示唆します。

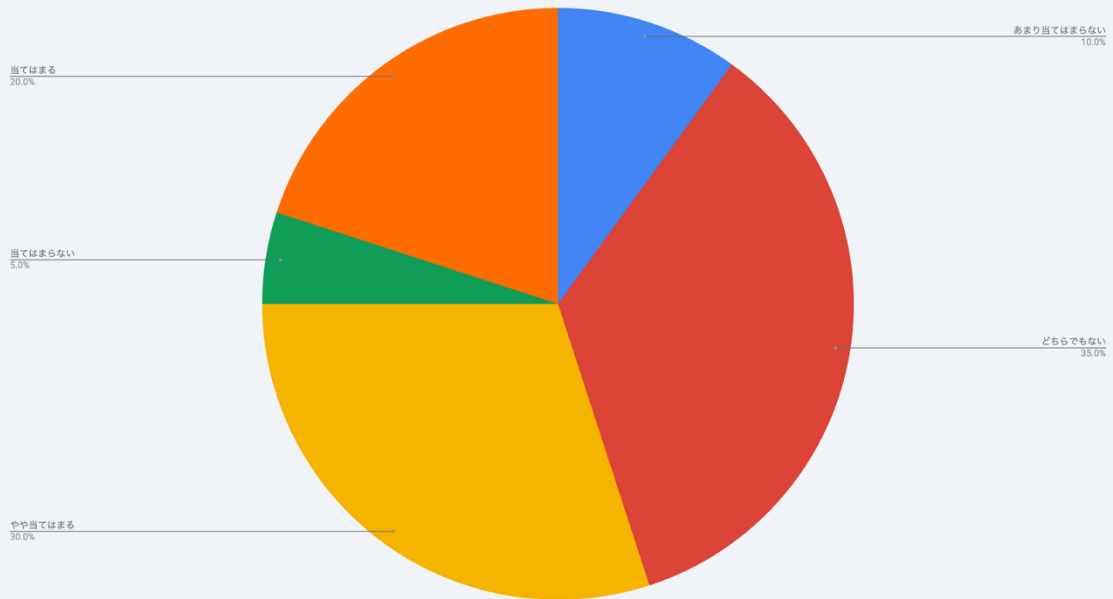
4. 社会人基礎力 (主体性・思考力・チームワーク)



円グラフ: 4年生 - 10. 考え抜く力が身に付いている



円グラフ: 4年生 - 11. チームで働く力が身につけている



社会人基礎力は慎重な評価: 「考え抜く力」と「チームで働く力」のどちらも、「どちらでもない」が最多となっており、3年生が「当てはまる」層が最多であったことと比較して、4年生は自己評価が中立的・控えめになる傾向があります。

これは、社会に出るにあたって「十分身につけている」と断言するには至らないという、自己に対する厳しさの表れとも考えられます。

総合的なまとめとして、4年生は、高い授業参加率と主体的な学習態度によって専門知識を堅実に身につけている層が多数派です。一方、プレゼンテーション能力や、社会人として求められる「考え抜く力」「チームで働く力」といった応用的な能力については、卒業を前に

して、まだ十分に身につけていないと感じている、あるいは、より高い水準を意識して慎重な評価を下していることがデータから読み取れます。

【今後目指すべき学修】

現状、学生は基礎知識の習得や授業への積極的な参加（インプット）に高い意欲を示しています。今後は、この基礎の上に、応用力の深化と大学理念との統合を図るフェーズへと移行することが、学生の成長を促す鍵となります。

今後目指すべき学修の柱としては、以下の3つが上げられます。

1. 知識の「応用・実践」への移行：アウトプット指向の学習設計

従来の「知識を学ぶ」学習モデルから、「知識を使いこなす」実践的な学習モデルへと軸足を移します。学生が自ら考え、実行し、その結果を発信するアウトプットの機会を、学年・学科を問わず、高頻度で組み込みます。

2. 「理念と行動」の構造的統合：自己成長の可視化

大学の「学風の指針」「学風の目標」を、単なるスローガンではなく、学生自身の学習行動やキャリア形成の判断軸として機能させます。学生が自らの成長を、大学の理念に照らして振り返る「リフレクションの機会」を必須化します。

3. 小規模性の活用：「質と密度」を高めたラーニング・コミュニティの構築

小規模大学ならではの教員・学生間の近接性、学科・学年の垣根の低さといった利点を、学習の「質」と「密度」を高めるために最大限に活用します。形式的な一斉指導ではなく、個別化・少人数制・学年横断型の指導体制を強化し、すべての学生に質の高いフィードバックが届く環境を整備します。

これらの方向性を基に、学生の総合的な能力を効果的に引き上げることができると考えられます。

以上